

口頭発表「心も知も育つ親子飼育活動」

—家庭や地域との連携を通して—

吉良 智子* 榎戸 裕子**



1 はじめに

本園は、愛知県名古屋市南の知多半島の中心に位置し、園児数160名7学級の園である。近隣に公共文化施設が立ち並び、教育熱心な保護者が多く、子どもたちは情報から得た知識は豊富である。し

かし、行動が伴わなかったり感情をコントロールすることが難しかったりする現状がある。

そこで、人間として生きていく上で基本となる心を幼児期に育てたいと思い、平成18年度より親子継続飼育活動を通して、命を感じる教育を進めてきた。その結果、子どもも保護者も直接体験を通して、生き物や人への思いやりの気持ちが育ち“いのち”を心と体で感じることができるようになってきている。

5年目となる今年度は、さらに家庭や地域に働き掛けることでその浸透を目指し、自分たちで生き物のために何ができるかを考えながら全園児・全保護者で親子飼育活動やリサイクル活動を進め、心も知も育つように実践を深めることにした。

2 過去4年間の研究の経過（平成18年度～平成21年度）

年 度	○主な取組	◎成果 ・ ☆課題
18年	○子どもの興味・関心に基づいて動植物とかかわることができるように、園内環境の見直しを図る。 ・父親による栽培園作り ・園児によるアオムシ用のパセリの苗植え	◎生き物と触れ合える環境を整えたことにより、身近に感じるようになってきた。 ☆子どもの興味・関心の強い飼育に重点をおき、取組を考える。
19年	○生き物と触れ合う体験の充実に向け、発達に合わせた生き物を学年ごとに考え、飼育活動表を作成し、飼育活動に取り組む。 年少…ダンゴムシ、年長…ウサギ 年中…アオムシ・ザリガニ	◎継続飼育をしたことで子どもの興味・関心が深まってきた。 ☆保護者の関心度に差があるため、啓発方法を工夫する。
20年	○昨年度からの飼育活動の継続の中で、保護者の協力を得ながら“親子飼育活動”に取り組む。 ・獣医師との交流開始 ・保護者ボランティアによる、ウサギの爪切り・シャンプーなど	◎率先して生き物に触れたり世話をしたりする親子が増えてきた。 ☆家庭や地域に働き掛け“いのち”を感じる教育の浸透を図る。
21年	○地域の協力を得ながら、保護者に継続飼育の意義を知らせ、親子継続飼育活動の充実を図る。 ・全国学校飼育動物研究会事務局の中川美穂子氏による幼小連携講演会 ・ゲストティーチャー（卒園児親子・在園児の父親）による体験談など	◎有識者や獣医師の話を聞くことで、継続飼育の意義を知り、飼育活動に関心を示す保護者（特に父親）が増えた。 ☆全園児・全保護者が取り組むことができるような方法を考える。

3 研究のねらい

【仮説】

親子飼育活動を通して、保護者と共に心をゆらす体験を繰り返しながら、“いのち

”を感じ、命を大切にしようとする心が育ち、知につながるであろう。

各学年のねらい

- 年少3歳児：身近な生き物を見たり触れたりして、親子で親しみをもつ。
- 年中4歳児：親子で身近な生き物に興味・関心を持ち、進んでかかわろうとする。
- 年長5歳児：親子飼育活動を通して思いやりの気持ちをもちながら、自分たちでできることを探り、ウサギのためのリサイクル活動に取り組む。

- (1) 生き物との触れ合い年間計画表と親子飼育活動表の検証
- (2) リサイクル活動年間計画表の作成各～ウサギのために頑張るぞ～
- (3) 各学年のねらいを基にした実践・家庭や地域との連携
環境や援助の在り方の探究・保育参観やたよりの充実
家庭や地域との交流（獣医師・ゲストティーチャー・半田市クリーンセンターなど）

5 実践

(1) 家庭や地域との連携

- ① “親子わくわく会”（平成21年6月20日 土曜日 9時～14時）
全国学校飼育動物研究会事務局長の中川美穂子氏による話を聞き、命を大切にす
る心の育成をねらいとして幼児期・児童期
ならではの体験の充実に理解を得られるよ
うにした。
- (7) 幼小連携講演会 「いのちを守るって
どういうこと？」
（年長児保護者・宮池小1～3年児童とそ
の保護者対象）
- (イ) 年少・年中児保護者対象講演会
「言葉では伝えられない～心・いのち・脳
をはぐくむ～」
- (ウ) ウサギとのふれあいタイム（年長児と
その保護者対象）
- ※アンケート提出者の97%の幼稚園保護者
は「触れ合いの体験で様々な感情が育つ
ことを再確認した」など「よかった」と
回答した。
- ② 獣医師との交流（随時）
- 地域の獣医師を招き、ウサギの世話や夏
休みの里親体験を通して出た疑問点や
専門的な立場からの話を聞いて、その
後の世話の参考にできるようにした。（
平成21年9月25日 年長児とその保護
者対象）
- 世話の引継ぎ会で今まで世話をしてきた
年長児とこれから世話をする年中児と
一緒に、ウサギも人間と同じで、思い
やりの気持ちをもって育てることが大
切であるという話を聞き、ウサギの世



話をする意欲につながった。（平成22年
3月4日年長児と年中児）

- 地域の動物病院へ行き、自分たちが昨年
度の年長児から引継ぎ、今年度ウサギ
の世話をすることを伝えた。また、困



ったことや分からないことを教えても
らうように依頼をしたり、院内でリハ
ビリ中の犬の見学をさせてもらったり
した。（平成22年6月10日年長児）

- (2) 年少3歳児 ダンゴムシ・ウサギ（ロ
ッピー、クロ、シロ、イチゴ）との出
会い（4月～）

入園当初より、身近にダンゴムシやウ
サギを見たり触れたりできるように、飼育
ケースやケージ、絵本や図鑑を置いた。ウ
サギはどの子も好きで、えさやりをしたり、
しぐさを真似たりして遊ぶことが多かった。
しかし、ダンゴムシを怖がる子がいたため、
教師が実際に触ってみて、「かわいい」と
いう気持ちを言葉や表情で伝えたり、親子
でダンゴムシバックを作って一緒に探したり
した。徐々にだが、どの子もダンゴムシ
に興味や関心をもつようになってきた。

かかわりがもてるようになると、「どう
して丸くなるの？」「ウサギの食べ物は何
が好きなんだろう？」「赤ちゃんは何色か
な？」と知りたい気持ちが強くなり、自ら
絵本や図鑑を見るようになった。その繰り
返しで、ダンゴムシやウサギにより親しみ
をもつようになった。

(3)年長5歳児 青組のロッピーと紫組のクロの気持ちを考えて、自分たちでできることをしよう！

(4月～10月)

<p>〈ウサギの姿〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ケージの中でじっとしているが、外に出すと元気に走り回る。暑さで水をよく飲む。 	<p>〈子どもの姿〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 触れ合ったり、世話をしたりしようとする子が多い。 ・ 常に声を掛けたり様子を見たりしている。
---	--

ねらい：ウサギに思いやりの気持ちを持ち、自分たちでできることを考え、取り組もうとする。

気付く 4月～6月

- ウサギの生態について図鑑や絵本を見て調べ、実際のウサギの様子を見て知る。
- クロのケージがロッピーのケージと大きさが違ったり、ロッピーの給水器が壊れかけたりしている様子を見て、「狭くてかわいそう」「水が飲みにくそう」とウサギの気持ちを考えて話す。
- どうしたらよいかを友達同士で話すようになり、大きなケージや新しい給水器に替えるとよいことに気付く。

考え合う①③④⑥ 6月～7月 調べる・知る②⑤⑦

① クロやロッピーどうしたのかな？

子「ハハハあって息をしている時もあるね」
「ウサギってケージの中では跳ねないよね」
教「どうしてそんな姿になるのかな？」
子「狭いケージが嫌なのかな？」「暑いのかな？」
「水を飲む時、飲みにくそうだね」

② そうなんだ！

子「ウサギは暑いのが嫌だって」（図鑑や絵本を見て）
「ケージが狭いと、自由に動けないね」
「水をたくさん入れてあげないといけないね」
「氷を作って入れてあげようか」
「給水器が壊れかけているね」

⑤ リサイクルってなあに？

子「このマーク知っている」（図鑑や絵本を見て）
「この200ml牛乳パックもリサイクルできるかな？」
「家でもプラと紙を分けて捨てるよ」
☆ 地域の有志による「環境戦隊はんだエコレンジャー」のショーを親子で見て、リサイクルに関心をもつ。

③ ケージや給水器を替えるにはどうするの？

子「新しい物に買い替えをしてあげよう」
教「お金はどうするの？」
④ お金を集めるにはどうするの？
教「どうしたら買い替えることができるかな？」
子「人形劇を見たり、夏祭り会でおやつをもらったのは、リサイクルをしたからなんだって。お母さんが言っていたよ」
「リサイクルで空き缶や牛乳パックを集めれば、きっとケージや給水器を買えるよね」

⑥ 何をどの位集めるといいの？

子「どうやってお金に換わるの？」
「何個集めるとケージや給水器が買えるの？」
「たくさんいるのかな？」
「お母さんも分からないって言っていたから、誰かに教えてもらいたいな」
☆ 市クリーンセンター職員の話聞いて、リサイクルの流れを知る。

⑦ リサイクルのこと分かった！

子「いろいろなマークがあるんだね」
「ゴミにしないで違う物に作り変えるんだね」
「すごいね、エコなんだって」
「大きな袋で30集めると、ケージと給水器が買えるんだね」
「ロッピー、クロ、待っていてね」

！『空き缶を30袋集めるとケージと給水器を買うことができる』という目標を持ち、意欲が高まる。！

やってみる 7月～9月

- 自ら空き缶や牛乳パックを持って来て、「ロッピー、クロ、今日はこんなに持って来たよ」と声を掛ける。
- 保護者や年少・年中児にも話をし、たくさん持って来てもらえるように協力を依頼する。
- 年6回のリサイクルデー以外の時にも回収できるように、リサイクルボックスを制作し、常設する。
- 空き缶や牛乳パックを持って来る年少・年中児が増える。



給水器購入という目標達成・ **ロッピーの死** 10月8日

年長青組で飼育していたロッピーが明け方亡くなった。全園児でお別れ会を行い、一人一人がロッピーに声を掛けた。動かなくなったロッピーの姿を見て「動かないね」「抱っこできないの？」「もっと一緒に遊びたかったな」などと話したり、冷たくなったロッピーの体に触れ「冷たい」「抱っこしたらふわふわで温かかったのに」と、何度も体をなでたりしている。

「ロッピーの給水器、新しくしてあげられなかったね…」と、子ども同士で残念そうに話をしている姿が見られた。給水器を購入するだけの空き缶が集まったことを厚生部の保護者が知らせてくれたので、すぐに購入し、「天国で使って欲しい」という子どもたちの考えで、ロッピーの棺に入れて火葬をした。

<考察>

- 継続的なウサギの世話を通して、様子や住んでいる環境に気付き、自分だったらどうだろうとウサギの立場になり考えたり、調べたりしながら取り組むことができた。
- ロッピーの死に直面し、「悲しい」「悔しい」などの思いを抱き、涙を流した子が多くいた。子どもたちには「給水器を新しくしてあげられなかった」という残念な思いが残ったが、男児の意見で、棺の中にリサイクルで新しく購入をした給水器を入れ、一緒に火葬できたことはよかった。



6 研究の成果と今後の課題

(1) 今年度の成果

- 年長児の気付きや考えを基に他学年や保護者に働き掛けたことにより、年長児の思いが浸透し、園全体でウサギのためのリサイクル活動に取り組むことができた。家庭や地域の獣医師との連携で、ウサギの世話の仕方や生態について知ることができた。また、地域の環境戦隊エコレンジャーや市クリーンセンターの方の協力を得ながら、考えたり調べたりする時間を十分に確保し進めたことで、リサイクルの仕組みやマークなどにも興味や関心が広がった。
- ロッピーの死により「動かなくなった」「冷たくなった」「反応がなくなった」など五感を通して「死」という現実を知り、悲しみや心の痛みや新しい給水器で水を飲ませてあげられなかったという空しさを感じる事ができた。

(2) 5年間の成果

- 命を大切に作る心は一朝一夕で形成されるものではない。その年度の成果を基に次年度の課題を設定し、子どもたちが試行錯誤する時間や空間を意図的に作り、継続飼育に取り組んできた。保護者に継続飼育の意義を有識者や獣医師の協力により知らせたり、子どもの思いや取組を伝えたりすることで、徐々に思いやりの気持ちをもって接するようになってきて

- いることを実感し、“いのち”を感じる教育の浸透を確信した。地域の方の協力を得ながら、じっくりゆっくり保護者と共に取り組んできたことがよかった。
- 親子飼育活動表の実践を進めてきたことで、子どもたちは生き物に無理なく触れながら、「かわいい」「どうしたら喜ぶかな」と心をゆらすようになった。子どもたちが生き物に愛着をもち始めると、知りたい気持ちが強くなり、様々な疑問がわき始め、自ら進んで絵本や図鑑などを調べたり周りの大人に聞いたりした。すなわち、生き物との出会いや継続的な触れ合いを通して、心を動かしていくことが知もはぐくむことにつながると確信した。
 - ウサギのロッピーの死は、親も子も心に突き刺さった出来事であった。「悲しい」「寂しい」「悔しい」などの気持ちは、記憶の底に残るものである。このような心が痛む直接体験こそが人格形成に大きく影響を与え、命を大切にしようとする心をはぐくむ。と同時に、最も大切なことの一つに、その後の子どもたちへの働きかけであることを学んだ。
 - 中川先生の計らいで、他県の小学校から生後三ヶ月のウサギを頂いたことにより、ロッピーに対し、「長生きしてくれてありがとう」と感謝の気持ちに変わった。心の中で、踏ん切りを付けることができた子どもたちは、思い出を胸にしまい、笑顔で巣立つことができた。



(3) 今後の課題

- 幼児期にはぐくまれた感性は、その後の児童期や人生に大きな影響を与える。今後も、獣医師と連携を図りながら、相手を思いやる心と相手を知りたいという思いから得る知識を絡み合わせながら、“いのち”を感じ、命を大切にしようとする心を育てていきたい。

(* 愛知県半田市立宮池幼稚園教諭)
(* * 愛知県半田市立宮池幼稚園園長)